

Вестник № 63

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学部露文コース室

tel: 03-5286-3740

e-mail: robun@list.waseda.jp

<https://dpt-bun-russia.w.waseda.jp/>

- 会員の近況より
笠間啓治先生の思い出
井桁貞義先生を偲ぶ会
- 会員の最新情報
- 早大ロシア文学会維持会員制度についてのご希望
- 学会だより
- 2025 年度春季公開講演会・総会のお知らせ

藻利佳彦
町田航大

会員の近況より

今号では、2025 年 3 月 6 日にご逝去された笠間啓治先生（本学名誉教授）の思い出について、東京ロシア語学院の藻利佳彦先生に寄稿していただきました。また、2025 年 1 月 18 日に開催された「井桁貞義先生を偲ぶ会」の様子を町田航大氏（大学院博士後期課程 3 年）が伝えてくれています。

笠間啓治先生の思い出

藻利佳彦

笠間先生が亡くなられたという知らせに胸が詰まった。今はただ、久しくお会いすることができなかった不義理をお詫びするしかない。

先生にはたくさんのお話を聞いていただいたが、プーシキン学に関する授業は忘れられない。「プーシキン学の定義」からはじまり、「作品文献目録」、「プーシキン関係文献目録」、「原典批判（手稿、写本、印刷物）」、「伝記研究」、「作品研究」等々、項目ごとに当時の研究の到達点をまとめ、それぞれの「必読文献」を列挙してくださった。この授業は単にプーシキンを研究する者だけでなく、およそロシア文学研究を志す者に勉強のイロハを伝えてくれる貴重な授業だった。先生は毎回タイプ打ちの文献一覧を用意して一つ一つそれぞれの長所と欠点を説明してくれた。プーシキン研究において原典批判がいかに重要であるかについては時間をかけて事例を挙げながら細かい解説がなされた。また、論文の書き方、特に引用文献の正しい書き方なども叩き込まれた。ロシアでの図書館や公文書館では施設によって資料の記入方法が異なる場合がある。これに比較的容易に順応できたのは、何種類も

の表記例を教えていただいたおかげである。

先生の語り口は常に威厳に満ちていたが、不意に始まる「ロシア文学与太話」には笑いをこらえるのに苦労した。真偽のほどがあまりに疑わしい内容に、つい「どうしてそんなことが言えるのですか」と質問すると、たいてい資料の裏付けをもって返答されるのには驚かされた。食べ物の説明になると念がいった。「黒パンにバターをたっぷり塗ってその上にキャビアを乗せて」とにこやかに説明してくださったが、急な話題の転換にこちらは面食らい、ただ口を開けて聞くしかなかった。しっかりした授業と脱線との落差が笠間先生の魅力のひとつでもあった。研究には緊張と適度な緩和が必要だと身をもって教えてくださった。

笠間先生は日本プーシキン学会発足の呼びかけ人のひとりだった。少しく先生のお手伝いをした者として、この学会と先生のことを記しておく。1988年7月16日、日本プーシキン学会の設立会合が大隈会館の一室で行われた。この設立会合には、プーシキンについての仕事がある研究者十人余が集まったが、会員規定に関する意見が百出してなかなかまとまらなかった。最終的に、「広くプーシキンに関心を持って勉強・研究している人たち」を会員として「まず実際に研究発表会を続けていく」ということで落ち着いた。この会合が、抽象的な議論で終わりそうな最後の局面で、「何とか会の発足をしたい」と粘り強く訴えておられた笠間先生の姿が目に焼き付いている。

同年10月に最初の研究発表会が開かれ、翌年より年2回～4回の研究発表会がはじまった。プーシキンの専門家、広くロシア文学を研究している先生方、大学院生、在野の研究者が参加して研究発表が行われ、やがて、若手研究者の発表の場としても一定の役割を果たすようになる。笠間先生は、理工学部の自分の研究室を日本プーシキン学会の事務局として、発表会の開催、会報の出版、内外の連絡、会計等を一手に引き受けられた。会報がきちんと定期的に発行されたのは先生のおかげである。地道な作業によって、日本プーシキン学会の土台を支え続けたのは笠間先生であった。

サンクト・ペテルブルクのロシア文学研究所とロシア科学アカデミー・プーシキン委員会は、国際会議「プーシキンと世界の文化」を1991年より隔年で開催した。日本プーシキン学会は、この会議に希望者が積極的に参加できるように広く情報を伝え、必要な援助を行った。この国際会議は、ミハイロフスコエ(1991年)、トヴェリ(1993年)、オデーサ(1995年)、ニジニ・ノヴゴロドとポロジノ(1997年)、サンクト・ペテルブルク、オデーサ、トビリシ、モスクワ(1999年)、といったプーシキンゆかりの地で開催された。これらの場所で、日本のプーシキン研究者、ロシア文学研究者とロシアのプーシキン専門家たちとの交流が実現した。また世界のプーシキン研究者、欧米はもとより中国、韓国、ベトナムといったアジアの研究者たちとも親交を深めることができた。その結果、資料や出版物の交換、人的交流が行われた。笠間先生もこの国際会議で何度も発表をしている。なかでも第2回での発表「プーシキンに及ぼしたラファターの影響」は、フリーメーソンの問題を取り上げたものとして異彩を放っていた。ロシアのプーシキン研究では、フリーメーソンはデカブリズムとの関係においてのみ考察されていたので、先生の発表は注目を呼んだ。研究は常に独創的でなければならない、というのが先生の口癖で、この発表で自らそれを実践された。ロシアのプーシキン専門家の間で、「カサマサン」はいつしか、日本プーシキン学会の代表者の名前となっていた。

合掌
(東京ロシア語学院)

井桁貞義先生を偲ぶ会

町田 航大

2025年1月18日（土）、早稲田大学戸山キャンパス34号館453教室にて、昨年8月に逝去された井桁貞義先生（早稲田大学名誉教授）を偲ぶ会が開催された。井桁先生は2013年に退職されたため、筆者自身は先生の講義を直接受ける機会こそなかったが、『ドストエフスキー・言葉の生命』（群像社、2003）をはじめとする著作を通じて先生の学識に触れ、同じくドストエフスキーを研究する者として、不思議な縁を感じていた。

偲ぶ会では、同世代の先生方や教え子である教員たちが次々に登壇し、それぞれの記憶に残る井桁先生との交流を語った。どの話も興味深く拝聴したが、ここでは特に印象に残ったエピソードに絞って書き留めたい。

まず、学生時代から半世紀以上にわたって井桁先生と切磋琢磨してきた伊東一郎氏は、井桁先生が強い知的好奇心と研究への野心を持ちながら、仲間との協働を大切にしていた人物であったことを振り返った。ロシア語クラス、露文クラス、露文大学院の各段階で、常に同人活動を呼びかけ、学びの場を楽しく築いていったという。また、先生は『井桁版ロシア文学史』の構想や、ドストエフスキー四大長編の完訳、プーシキンから現代にいたるロシア散文史の通史など、多くの計画をあたためていたが、教務に追われるなかで体調を崩し、それらの実現が叶わなかったことを伊東氏は惜しんだ。

続いて登壇した山之内重美氏は、学生時代の井桁先生を生き生きと描き出した。電車内で周囲を気にせずロシア語で会話する姿や、「あれやろう、あそこへ行こう」と率先して提案するリーダーシップ、軽井沢でテニスを楽しむスマートな好青年としての一面が語られた。一方で、教員になった後の井桁先生は、教務に忙殺される大学の世界の不自由さに苦しみ、「僕は顔面神経痛になりそうだ」と漏らすこともあったという。

岩田貴氏は、1989年にモスクワで出会った井桁先生との思い出を紹介した。日露演劇交流史のなかでも重要な女優・岡田嘉子との交遊の場での出会いであった。井桁先生の編集した雑誌『ノーマル』（1988～1992）へのロシア演劇の劇評の連載をきっかけに、岩田氏自身もチェーホフ研究から現代ロシア演劇研究へ本格的に進むことになったという。この話から、井桁先生の人を巻き込む力、幅広い交友関係が印象に残った。

長與進氏は、1979年にブラチスラヴァで井桁先生と会った際の逸話を語った。留学中だった長與氏を、スラヴィスト会議のために現地に滞在していた先生が訪ねてきた際、長與氏が日の丸の旗を振って迎えたことに対し、先生は「おいおい、日の丸かよ」と戸惑ったという。学生運動を経験した世代としての一面がうかがえるエピソードである。その後、論集『スラヴァンスキー・バザール』（水声社、2021）の編集を通じてより距離が近くなった長與氏は、先生が亡くなる直前の電話でも、論集第2集のプランについて30分も話していたと回想し、先生の変わらぬ思考の明晰さに感服したと述べた。

望月哲男氏は、ドストエフスキー研究者としての井桁先生の業績を網羅的に振り返った。望月氏によれば、先生は常に先んじてvividなものを紹介する視野の広さと思いやりの深さをもった人だったという。1977年8月の国際ドストエフスキー学会（デンマーク）では、先生は新谷敬三郎・木下豊房両氏に代表される日本の研究動向を発信し、国外との接続の端緒をひらいた。またインターネットが広がっていく1990年代には、ハイパーリンクやネットワークの中にバフチン的な対話性を探っていた。SNSが浸透した今日から見ると、いかに先生が先駆的な考えの持ち主であったかがうかがえる。

貝澤哉氏は、「学生と教師の間であろうと学問の世界では対等だ」という考えから、井桁先生が常に学生を一人の大人として扱っていたことを伝えた。同時に、「ドストエフスキイの会」の会誌の校正・編集の手伝いを頼まれ、毎回の例会や飲み会に連れていかれた自分の体験を振り返りつつ、先生は常に学生の面倒見のよい人だったとも述べた。また貝澤氏によれば、井桁先生はまだ誰も手をつけていないことを大変好み、次々と面白い着想を出していくアイデアマンだったという。

最後に、井桁ゼミの出身者たちが登壇し、それぞれの思い出を語った。桜井厚二氏は、映画やアニメなどの映像資料を活用してドストエフスキーを論じる先生の斬新なスタイルに衝撃を受けたことを語り、粕谷典子氏は、研究の方向性に迷っていた自分を博論完成まで導いてくれた恩師への感謝を表した。高柳聡子氏は、論文に行き詰まった際に1~2時間の長電話で熱心に助言してくれた先生の姿を振り返り、神岡理恵子氏は、ゼミの和気藹々とした空気が伝わる写真の数々を紹介した。坂庭淳史氏は、NHK「ロシア語会話」に出演された当時の井桁先生の映像を会場で上映し、ロシア語を教える生き生きとした先生の姿を共有した。

また井桁先生は、授業で出席カードの裏に感想や質問を書かせ、次回の授業でそれを印刷・配布してコメントするというスタイルの考案者であり、この形式は今でも多くの教員に受け継がれている。坂庭氏によれば、これは「文字のかたちではあるが、教室内の学生たちの声が響きあう様を見せたかった井桁先生の工夫」だったという。偲ぶ会でもこの形式が踏襲され、様々な年代の教え子や知人が綴った井桁先生への感謝の言葉が、A3用紙の両面にまとめて印刷され、会の終わりに配布された。

偲ぶ会は、井桁先生の人柄と業績の豊かさを改めて実感できる充実した時間であった。筆者自身、直接お目にかかる機会を得られなかったことが悔やまれる。先生の研究に通じる一介のドストエフスキー研究者としては、先生の先駆的な着眼点や方法に学びつつ、それらを今日の海外の研究動向とも接続することで、連綿と続いてきた日本のドストエフスキー研究の意義を明確化していくことが、今後の一つの課題となると感じられた。

(大学院博士後期課程3年)

2025年上半期会員の最新情報（2025年5月12日調べ）

- アントン・チャーホフ著、安達紀子訳『ワーニャ叔父さん——四幕からなる田舎の暮らしの情景（ロシア名作ライブラリー）』群像社（2025/02）
- 五木寛之著『遊行期 オレたちはどうボケるか』朝日新聞出版（2025/01）
- 五木寛之著『忘れ得ぬ人 忘れ得ぬ言葉』新潮社（2025/01）
- 五木寛之著『よりそう言葉（五木寛之が贈る「名言」）』毎日新聞出版（2025/03）
- 鎌田 慧著『日本の原発地帯（鎌田慧セレクション 現代の記録3）』皓星社（2025/01）
- 鎌田 慧著『さようなら原発運動（鎌田慧セレクション 現代の記録4）』皓星社（2025/03）
- 鎌田 慧著『自動車工場の闇（鎌田慧セレクション 現代の記録5）』皓星社（2025/05）
- 沓掛良彦著『凍れる美学——定家と和歌についての覚え書き』

東京外国語大学出版会（2025/03）

- 沓掛良彦著『恍惚惨人詩話 カスタリアの泉に汲んで——古典詩の記憶から』
大和プレス (2025/04)
- 沓掛良彦著『エラスムス 人文主義の王者』岩波書店 (2025/04)
- 佐々木朔著『往信』書肆侃侃房 (2025/02)
- 東海林さだお著『干し芋の丸かじり』文藝春秋 (2025/02)
- 高柳聡子著『ロシア 女たちの反体制運動』集英社 (2025/04)
- ニコライ・チェルヌイシェフスキー著、多和田栄治編訳『宛名のない手紙』白水社 (2025/03)
- ジェフリー・アーチャー著、戸田裕之訳『時のみぞ知る クリフトン年代記 第1部』
ハーパーコリンズ・ジャパン (2025/01)
- ジェフリー・アーチャー著、戸田裕之訳『死もまた我等なり クリフトン年代記 第2部』
ハーパーコリンズ・ジャパン (2025/01)
- ジェフリー・アーチャー著、戸田裕之訳『裁きの鐘は クリフトン年代記 第3部』
ハーパーコリンズ・ジャパン (2025/01)
- ジェフリー・アーチャー著、戸田裕之訳『追風に帆を上げよ クリフトン年代記 第4部』
ハーパーコリンズ・ジャパン (2025/04)
- ジェフリー・アーチャー著、戸田裕之訳『剣より強し クリフトン年代記 第5部』
ハーパーコリンズ・ジャパン (2025/04)
- 中村喜和編訳『ロシア中世物語集』筑摩書房 (2025/02)
- 三浦清美編著『「ロシア精神」の形成と現代』松籟社 (2025/01)
- 三木 卓著『鎌倉日記IV 最終章 2019・5-2023・12』かまくら春秋社 (2024/11)
- アーノルド・ローベル著 三木卓訳『Frog and Toad All Year ふたりはいつも』
ラボ教育センター (2024/11)
- 宮川健郎編 三木卓、茨木のり子他著『少年が見た戦争』汐文社 (2025/01)
- グレン・ゲールド著、ティム・ページ編、宮澤淳一訳『グレン・ゲールド著作集』
みすず書房 (2025/04)
- アレクサンドル・クプリーヌ著、桃井久直訳『ガンブリヌス：クプリーヌ短編集』
スラヴァ書房 (2024/12)
- 山中千瀬著『死なない猫を継ぐ』典々堂 (2025/01)

*** 著書を上梓された会員の方は、ぜひ編集部までご一報ください ***

早大ロシア文学会維持会員制度についてお願い

早大ロシア文学会の「維持会員制度」は、すでに多くの方々からのあたたかいご支援を頂戴しております。おかげさまで、毎年『ロシア文化研究』を発行することができております。『ロシア文化研究』発行の他にも、ニューズレター「ヴェスチ」の発行・送付、春季・秋季公開講演会の諸費用等にも、皆様より寄せられた会費が充てられております。

この制度は、会員の方々から広く「維持会員」を募り、維持会員になって頂いた方には、その年度の『ロシア文化研究』を年度末の発行に際して1冊お送りするという制度です。学会誌・ニューズレターの発行、講演会の諸費用等は大学からの補助だけではまかないきれません。会員の皆様には、本学会が担い続けている、日本のロシア文化研究の中心的役割をご理解のうえ、ぜひともご支援をお願い申し上げる次第です。一人でも多くの会員の方々からご支援を賜りますよう、お願いを申し上げます。維持会員になっていただけます方は、以下の要領にてご送金くだされば幸いです。

- (1) 年会費は1年につき2,000円となります。
- (2) 維持会員費納入には、同封の郵便振替用紙をご利用ください（口座番号 00160-7-87172 加入者名 早稲田大学ロシア文学会）。差出人欄には、住所と氏名だけでなく、郵便番号と電話番号も必ずお書きください。
- (3) 複数年のお振込みをいただいた方には、自動的にその年度発行分以下、『ロシア文化研究』を、発行され次第、順次、送本申し上げます。
- (4) 『ロシア文化研究』は、年度末に発行されます。従いまして、前年度の『ロシア文化研究』をご希望の方は、振替用紙の通信欄に、その旨、お書き添えください。

少しでも多くの皆様のご協力とご支援を重ねてお願い申し上げます。

学会だより

- 2025年3月に文学部ロシア語ロシア文学コースから5名が卒業しました（うち9月卒業者1名）。文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程の修了者は3名でした。
- 2025年度の文学部ロシア語ロシア文学コースへの進級者は7名でした。文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程への入学者は0名、博士後期課程への入学者は3名でした。
- 2025年度春季公開講演会・総会が6月28日（土）に催されます。詳しい日時・場所につきましては、次項（7頁）をご覧ください。
- 柳富子先生（本学名誉教授）が2024年11月7日（木）にご逝去されました。
- 笠間啓治先生（本学名誉教授）が2025年3月6日（木）にご逝去されました。

*** ヴェスチに情報掲載を希望される方は、編集部まで原稿をお寄せください ***

2025 年度春季公開講演会・総会のお知らせ

早稲田大学ロシア文学会では、2025 年 6 月 28 日（土）に 2025 年度春季公開講演会・総会を開催いたします。講演会では、独立行政法人国際協力機構（JICA）東・中央アジア部中央アジア・コーカサス課で活躍されている林愛子氏（2017 年度ロシア語ロシア文化コース修士課程修了）に「私の『在外』お仕事概観：キルギス、ウクライナで働く」と題するご講演をいただきます。

なお、総会は講演会終了後に引き続き執り行います。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

●講演会

日時： 2025 年 6 月 28 日（土）15 時 00 分から（16 時 40 分終了予定）
会場： 早稲田大学戸山キャンパス 34 号館 151 教室

「私の『在外』お仕事概観：キルギス、ウクライナで働く」

林 愛子 氏

独立行政法人国際協力機構（JICA）
東・中央アジア部 中央アジア・コーカサス課 専門嘱託

* 会員のみならず、一般、学生の皆様のご来場を歓迎いたします。

●総会

講演会終了後、引き続き、同じ 34 号館 151 教室にて開催します。

☆講演会・総会終了後、懇親会も予定していますので、奮ってご参加ください。